

ニホンウナギ絶滅危惧種

26.6.13
木曜日

「食文化消える」

県内生産者や料理店不安

「経営が成り立たない」「うなぎの食文化が消える」。ニホンウナギが国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストで絶滅危惧種に分類された12日、県内関係者からは輸出入の規制や価格高騰など、今後を不安視する声がかれた。ニホンウナギの稚魚・シラスウナギの減少に苦しんできた養殖業者からは「資源保護の取り組みも必要」との声も上がる。

IUCNはニホンウナギを絶滅危惧種に分類した理由に、シラスウナギの漁獲量が大きく減ったことなどを挙げた。県水産政策課によると、県内のシラスウナギの漁獲量は、記録の残る1994年度の2470キロをピークに、2012年度には168キロに激減。13年度は496キロと回復

したものの、ピーク時の5分の1にとどまっている。レッドリストは国際間の取引規制を判断する際の有力な材料となるだけに、生産者は気をもむ。富岡市佐原町の高木養鰻（よしまん）場はシラスウナギの3分の1を海外から仕入れている。高木利秋会長は「国が何の対策も

講じないまま輸入が規制されれば、経営は成り立たなくなる」と訴える。漁獲量の減少に伴い、シラスウナギの1キロ当たりの取引価格は1994年度の34万3千円から、2013年度には61万9千円に上昇。最も安かった01年度の10万6千円と比べ、約6倍に達している。

水産庁によると、13年に養殖業者が池に入れたシラスウナギの量は12.6トン。うち、約6割の7.4トンを中国や台湾といった海外産が占める。国際取引が制限されれば、数が限られる国産の価格はさらに上がり、うなぎ料理店や小売店は窮地に追い込まれる。

「最近売れば売ると赤字」。うなぎ一カ本舗（同市和知川原十丁目）の長谷川海社長（65）は、苦しい胸の内を明かす。45年前の開店時に1キロ当たり2千円前後だった仕入れ値は、今では同5100円に高騰。かつての貯金を切り崩し、営業を続けている状況という。

長谷川社長は「これ以上高騰すれば、全国のうなぎ屋の多くは廃業するのではないかな。うなぎを食えるという文化す



ニホンウナギが絶滅危惧種に指定されたことで、飲食店は仕入れ価格の高騰に気をもむ。12日午前、富岡市和知川原十丁目のうなぎ一カ本舗

ら消えてしまふ恐れがある」と危惧する。

県養鰻漁業協同組合（業者）の岩切庄一組会長（67）は「ウナギの商売に携わる人がいなくなると、生産者も資源回復に取り組んでいく必要がある」と話した。